

# 松本清張が志向した推理小説と 地理的空間に対する考察

和田 稜三

- I. はじめに
- II. 推理小説の検討
- III. 推理小説の転換点
- IV. 松本清張の地理的空間
- V. 土地鑑から見た清張文学
- VI. 結語

キーワード：松本清張、推理小説、図上旅行、地理的空間、土地鑑

## I. はじめに

松本清張（1909～92年）は、明治・大正・昭和・平成を生きた、戦後日本を代表する作家のひとりである。しかし、彼が初めて小説を書いたのは、昭和二十五年、41歳になってからのことである。デビュー作の「西郷札」が『週間朝日』の〈百万人の小説〉に三等入選したことがきっかけとなって、彼は小説家を目指すようになった。この時点に注目すれば、小説家としてのスタートがきわめて遅かったと言える。昭和二十八年、代表作「或る『小倉日記』伝」が直木賞の選考に漏れたものの、芥川賞の選考委員会に回付された。その結果、この作品が第28回芥川賞に推挙された。芥川賞の受賞は、松本清張にとって人生の大きな転機になった。彼は、その後の40年間で約1,000編の作品を世に送っ

た。著作の分野は、推理小説、政治・社会小説、時代小説、ノンフィクション、古代史研究、昭和史研究、官僚機構論、取材日記、エッセイ、対談など多岐に及んでいる。それらの作品群をつぶさに見ると、8,000メートル級の峰々が林座するヒマラヤ山脈に例えることができる。推理小説を中心とする彼の作品は、西ヨーロッパばかりでなく中国や韓国及びロシアにおいても翻訳され、約200点の秀作が読まれている<sup>1</sup>。その意味で、松本清張は世界を代表する推理小説家のひとりであると言っても過言ではない。

筆者は、かつて彼の作品に対して動機と社会という視点から検討したことがあった<sup>2</sup>。本稿では、松本清張の膨大な作品群の中の推理小説すなわち作品の核心部に焦点を当てる。筆者は、ひとりの地理学徒という立場から、松本清張が志向する推理小説とその地理的な空間に対して検討を加え、清張文学の特徴を明らかにしたい。

## II. 推理小説の検討

### 1. 研究の枠組み

松本清張の推理小説は、170点を越えると思われる。その対象地域は、国の内外におよんで

<sup>1</sup> 北九州市立松本清張記念館編（2016）『世界文学と清張文学』、32～43頁。

<sup>2</sup> 和田稜三（2011）「動機と時空という視座から見た清

張推理小説の社会性」（冊子）、北九州市立松本清張記念館、1～27頁。

いる。従って研究の対象とする推理小説は、原則として①戦後の日本や日本人を描いている、②推理小説としての展開すなわちアリバイ崩しやトリック、謎解きが作品に認められる、③犯罪や反社会的行為を含め、殺人を主題のひとつとしている、④小説の舞台が日本である、という点に着目した。

①～④の着目点に当てはめたところ、「黒地の絵」（昭和三十三年三月～四月）、「黒い樹海」（昭和三十三年十月～三十五年六月）、「湖れ谷」（昭和三十九年一月～四十年二月）、「砂漠の塩」（昭和四十年九月～四十一年十一月）、「棲息分布」（昭和四十一年一月～四十二年二月）、「象の白い脚」（昭和四十四年八月～四十五年八月）、「百円硬貨」（昭和五十三年七月）、「お手玉」（昭和五十八年八月）、「記念に」（昭和五十三年十月）、「黒革の手帖」（昭和五十三年十一月～五十五年二月）、「詩城の旅びと」（昭和六十三年一月～平成元年十月）など除外せざるを得なかった。なお「失踪の果て」（昭和三十四年五月）、「黄色い風土」（昭和三十四年五月～三十五年八月）、「獄衣のない女囚」（昭和三十八年七月～十月）、「殺人行おくのほそ道」（昭和三十九年七月～四十年八月）は、検討する機会が得られなかった。

## 2. 研究の対象

殺人が伴わないか、殺人が未遂であったり、殺人が推定の域を出ない、というような作品であっても、検討の対象に加えることにした。前者の例としては「共犯者」「寒流」「落差」、後者の例としては「眼の気流」「屈折回路」「入江の記憶」「家紋」「田舎教師」「表象詩人」である。戦前の日本人を描いている「黒い血の女」「証言の森」「歯止め」は主題が推理小

説らしいという印象を受けた。「二階」は他殺ではなかったが、取上げることにした。検討すべき推理小説が余りに多いため、筆者の個人的な嗜好にやや偏ってしまったという感を免れないのかも知れない。

松本清張の推理小説を検討する際、基本的な文献として松本清張（1971～1996）『松本清張全集』【1～15、17～23、30、34～41、43、45～47、56、57、62、65、66巻】〈所収の132点の推理小説〉（文藝春秋社）、『松本清張全集』から漏れた『蒼い描点』（1960、光文社）、『高校殺人事件』（1961、光文社）、『果実のない森』（1964、光文社）、『二重葉脈』（1967、光文社）、『影の地帯』（1972、新潮社）、『眼の気流』（1976、新潮社）、『犯罪の回送』（1992、角川書店）、『隠花平原』（1993、新潮社）を使用した。該当すると想定されるすべての作品を読み終えた結果、研究の対象作品は140点に絞り込んだ（第1表）。

これらの推理小説は、長編、中編、短篇まちまちである。作品は、実に様々な月刊誌や週刊誌及び新聞紙に掲載された。作品のほとんどは週刊誌と月刊誌に書かれたが、『週間朝日』（31点）と『小説新潮』（23点）が抜きん出て多く、作品の半分は連載物であった。特に昭和三十六～三十八年頃、松本清張は推理小説だけでも毎年16～17点の連作物をかかえていた<sup>3</sup>。

## 3. 著作活動の時期

松本清張は、昭和三十年（1955）から平成二年（1990）にかけて、数多くの推理小説を書いたが、それを時期という点から見ると、かなりの偏りがある。試しに5年きざみとして時期を7区分した時、第Ⅰ期（1955～60年）44点、第Ⅱ期（1961～65年）33点、第Ⅲ期（1966～70年）

<sup>3</sup> 駒崎総男（2011）『松本清張著作活動記録（ダイヤグラム）』、自費出版、5～8頁。

第1表 研究対象の推理小説とそれらの概要

時期	番号	作品名	アリバイ	トリック	殺人等の場所	掲載紙	発表時期/和暦
I	1	張込み *			東京日黒 (舞台は九州S市)	小説新潮	30.12.
	2	顔			鳥根県, 殺人未遂	小説新潮	31.8.
	3	声		○	不明, 武蔵野	小説公園	31.10.~11.
	4	共犯者			強盗傷害, 小倉 (未遂)	週間読売	31.11.
	5	点と線		○	福岡県香椎海岸	旅	32.2.~33.1.
	6	地方紙を買う女		○	甲信地方K市臨雲峡 (F)	小説新潮	32.4.
	7	鬼畜		○	東京, (伊豆の海岸, 未遂)	別冊文春	32.4.
	8	眼の壁		○	新宿, 中央7ルプス, 中央7ルプス	週間読売	32.4.~12.
	9	一年半待て		○	不明	週間朝日別冊	32.4.
	10	白い闇			十和田湖, 奥入瀬川	小説新潮	32.8.
	11	カルネアデスの舟板 *			不明	文学界	32.8.
	12	捜査圏外の条件		○	東京阿佐ヶ谷	別冊文春	32.8.
	13	二階 *			不明 (自殺)	婦人朝日	33.1.
	14	ある小官僚の抹殺			熱海の旅館	別冊文春	33.2.
	15	ゼロの焦点←零の焦点←虚線			能登金剛, 鶴来町, 東京	宝石	33.3.~35.1.
	16	日光中宮祠事件			日光市	週間朝日別冊	33.4.
	17	額と歯			東京 (戦前)	週間朝日別冊	33.5.
	18	巻頭句の女			不明	小説新潮	33.7.
	19	蒼い描点			神奈川県仙石原, 真鶴町	週間明星	33.7.~34.8.
	20	遭難			鹿島槍ヶ岳	週間朝日	33.10.
	21	証言 *		○	向島 (偽証)	週間朝日	33.12.
	22	坂道の家			東京赤坂	週間朝日	34.1.~4.
	23	危険な斜面			山口県豊浦山林	オール読物	34.2.
	24	失踪			武蔵小金井	週間朝日	34.4.~6.
	25	影の地帯			東京, 天竜川, 国立, 柏原	河北新報	34.5.~35.6.
	26	波の塔 *			富士の樹海 (自殺)	女性自身	34.5.~35.6.
	27	歪んだ複写			東京阿佐ヶ谷	小説新潮	34.6.~35.12.
	28	紐			多摩川 (囑託殺)	週間朝日	34.6.~8.
	29	霧の旗			東京 (九州K市, 冤罪報復)	婦人公論	34.7.~35.3.
	30	寒流 *			不明 (左遷に報復)	週間朝日	34.9.~11.
	31	黒い血の女			和歌山県海草郡 (戦前)	オール読物	34.10.
	32	天城越え←天越こえ		○	天城峠	サンデー毎日特別号	34.11.
	33	高校殺人事件←赤い月			武蔵野台地	高校コース	34.11.~36.3.
	34	黒い福音			武蔵野台地	週間コウロン	34.11.~35.6.
	35	凶器			九州の黒岩村 (F)	週間朝日	34.12.
	36	球形の荒野			世田谷, 不明	オール読物	35.1.~36.12.
	37	濁った陽			不明⇒真鶴	週間朝日	35.1.~4.
	38	わるいやつら		○	不明, (殺人未遂)	週間新潮	35.1.~36.6.
	39	草			茨城, 東京, 山梨	週間朝日	35.4.~6.
	40	砂の器			蒲田操車場, 不明	読売新聞	35.5.~36.4.
	41	山峡の章←氷の燈火		○	作並温泉	主婦の友	35.6.~36.12.
	42	部分			不明	小説中央公論	35.7.
	43	駅路			長野県	サンデー毎日	35.8.
	44	誤差			温泉 (場所不明)	サンデー毎日特別号	35.10.
II	45	確証			東京	婦人公論	36.1.
	46	連環			不明, 南房総鋸山	日本	36.1.~37.10.
	47	蒼ざめた礼服			東京湾, 千葉県袖ヶ浦, 東京都, 横浜沖, 横浜沖 【推定】	サンデー毎日	36.1.~37.3.
	48	万葉翡翠			姫川上流	婦人公論	36.2.
	49	薄化粧の男		○	東京都練馬区	婦人公論	36.3.
	50	不安な演奏			柏崎沖, 尾鷲, 東京	週間文春	36.3.~12.
	51	死の発送		○	福島県飯坂温泉, 栃木県小山市	週間公論→小説中央公論	36.4.~8.
	52	潜在光景			東京, (殺人未遂)	婦人公論	36.4.
	53	時間の習俗		○	相模湖, 福岡県水城	旅	36.5.~37.11.
	54	典雅な姉妹		○	東京麻布	婦人公論	36.5.
	55	田舎教師			出雲地方葛城村 (F) 【推定】	婦人公論	36.6.
	56	鉢植えを買う女			不明	婦人公論	36.7.
	57	小さな旅館			東京都江古田	週間朝日別冊	36.9.
	58	老春			東京	新潮	36.11.
	59	落差 *			高知県川上市 (F) (傷害)	読売新聞	36.11.~37.11.
	60	ガラスの城			修善寺温泉, 深大寺	若い女性	37.1.~38.6.
	61	けものみち			不明, 神奈川県山林, 浦賀, 不明, 不明	週間新潮	37.1.~38.12.

時期	番号	作品名	アリバイ	トリック	殺人等の場所	掲載紙	発表時期/和暦
	62	犯罪の回送←対曲線		○	北海道北浦市 (F), 様似, 北浦市 (F)	小説新潮	37.2.~38.1.
	63	眼の気流		○	品川区戸越 【推定】	オール読物	37.3.
	64	果実のない森←黄色い杜		○	箱根山中, 強羅, 一碧湖	婦人画報	37.9.~38.8.
	65	事故		○	山梨巨摩郡, 山梨千代田湖	週間文春	37.12.~38.4.
	66	彩霧		○	清水港, 逗子	オール読物	38.1.~12.
	67	屈折回路		○	不明 (事故死), 集団殺人実験/三池炭鉱・北海道・千葉県蟹崎 【推定】	文学界	38.3.~40.2.
	68	熱い空気		○	不明, (愉快犯)	週間文春	38.4.~7.
	69	たづたづし		○	長野県, (殺人未遂)	小説新潮	38.5.
	70	切符	○	○	大分県耶馬溪	婦人公論	38.8.
	71	消滅		○	湘南地方N地	婦人公論	38.12.
	72	断線		○	青山墓地, 江ノ島	週間文春	39.1.~3.
	73	寝敷き		○	湯河原	週間文春	39.3.~4.
	74	草の陰刻		○	不明, 松山	読売新聞	39.5.~40.5.
	75	地の骨		○	東京	週間新潮	39.11.~41.6.
	76	中央流砂		○	作並温泉	社会新報	40.10.~41.11.
77	Dの複合		○	紀淡海峡, 熱海, 戸田, 大仁, 東京	宝石	40.10.~43.3.	
Ⅲ	78	二重葉脈		○	岡山県久米郡, 古市古墳, 金剛山, 青梅	読売新聞	41.3.~42.4.
	79	歯止め		○	不明, (戦前)	週間朝日	42.1.~2.
	80	隠花平原		○	東京, 熱海 (10人殺害)	週間新潮	42.1.~43.3.
	81	交通事故死亡1名		○	東京郊外, (殺人幫助)	小説新潮	42.2.
	82	種族同盟		○	東京	オール読物	42.3.
	83	偽狂人の犯罪		○	東京	小説新潮	42.3.
	84	犯罪広告		○	和歌山県海辺	週間朝日	42.3.~4.
	85	微笑の儀式		○	厚木	週間朝日	42.4.~6.
	86	家紋		○	越前地方の山村	小説新潮	42.4.
	87	史疑		○	北陸地方のF村	小説新潮	42.5.
	88	年下の男		○	高尾山	小説新潮	42.6.
	89	古本		○	不明	小説新潮	42.7.
	90	二つの声	○	○	東京	週間朝日	42.7.~10.
	91	ベルシャの測天儀		○	不明	小説新潮	42.8.
	92	証言の森	*	○	東京 (戦前)	オール読物	42.8.
	93	入江の記憶		○	瀬戸内の田野浦 【推定】	小説新潮	42.10.
	94	火と汐	○	○	東京目黒	オール読物	42.11.
	95	弱気の虫	○	○	東京市ヶ谷	週間朝日	42.11.~43.2.
	96	土偶		○	東北の山林	小説新潮	42.12.
	97	内海の輪←霧笛の町		○	有馬の蓬莱峡	週間朝日	43.2.~10.
98	山	*	○	長野県上山温泉 (事故死)	オール読物	43.7.	
99	喪失の儀礼←処女空間		○	名古屋, 深大寺, 不明	小説新潮	44.1.	
100	新開地の事件		○	武蔵野	オール読物	44.2.	
101	指		○	東京	小説現代	44.2.	
102	死んだ馬		○	東京	小説宝石	44.3.	
103	速力の告発		○	東京	週間朝日	44.3.~5.	
104	夜光の階段←ガラスの鍵	○	○	福岡県筑紫野, 青梅, 東京信濃町	週間新潮	44.5.~45.9.	
105	分離の時間		○	不明, 横浜	週間朝日	44.5.~9.	
106	証明		○	東京	オール読物	44.9.	
107	書道教授		○	東京下町⇒相模湖, 東京下町	週間朝日	44.12.~45.3.	
108	強き蟻		○	不明⇒熱海の旅館	文芸春秋	45.1.~46.3.	
109	梅雨と西洋風呂	○	○	水尾市 (F)	週間朝日	45.7.~12.	
110	火神被殺		○	鳥取県湯村温泉	オール読物	45.9.	
111	奇妙な被告	*	○	東京西郊外	オール読物	45.10.	
112	巨人の磯	○	○	茨城県五浦海岸	小説新潮	45.10.	
113	聞かなかった場所		○	長野県	週間朝日	45.12.~46.4.	
Ⅳ	114	水の肌←沈下		○	石川県	小説現代	46.1.
	115	二冊の同じ本		○	不明, (毒殺未遂)	週間朝日カラー別冊	46.1.
	116	葡萄草模様の刺繍		○	不明	オール読物	46.1.
	117	留守宅の事件	○	○	名取市	小説現代	46.5.
	118	生けるパスカル		○	不明	週間朝日	46.5.~7.
	119	遠い接近		○	鈴鹿山脈, 不明	週間朝日	46.8.~47.4.
	120	内なる線影		○	福岡県垣津村 (F)	小説新潮	46.9.
	121	礼遇の資格		○	東京都	小説新潮	47.2.
	122	恩誼の紐		○	中国地方, 青梅	オール読物	47.3.
	123	山の骨		○	不明, 多摩市	週間朝日	47.5.~7.
	124	表象詩人		○	小倉 【推定】	週間朝日	47.7.~11.
	125	理外の理		○	不明, (業務上致死か殺人)	小説新潮	47.9.
	126	高台の家		○	東京	週間朝日	47.11.~12.

時期	番号	作品名	アリバイ	トリック	殺人等の場所	掲載紙	発表時期／和暦
	127	駆ける男		○	瀬戸内の旅館	オール読物	48.1.
	128	告訴せず←黒の挨拶		○	荒川	週間朝日	48.1.~11.
	129	東経139度線		○	群馬県富岡市	小説新潮	48.2.
	130	山峡の湯村		○	飛騨小坂榊原温泉、殺人未遂	オール読物	50.2.
V	131	渡された場面		○	芝田市 (F)、坊城町 (F)	小説新潮	51.1.~7.
	132	渦		○	武蔵野、西伊豆	日本経済新聞	51.3.~52.1.
	133	馬を売る女←利		○	首都高速道路→相模湖	日本経済新聞	52.1.~4.
	134	十万分の一の偶然		○	東名高速道路、大井埠頭、千葉県鹿野山	週間文春	55.3.~56.2.
VI	135	彩り河			有楽町の映画館、山梨県塩山市、国分寺のアパート、北陸のT市 (殺人未遂)	週間文春	56.5.~58.3.
	136	疑惑←昇る階段	*	○	東京	オール読物	57.2.
	137	迷走地図			東京	朝日新聞	57.2.~58.5.
VII	138	数の風景			山陰地方	週間朝日	61.3.~62.3.
	139	黒い空		○	不明、不明	週間朝日	62.8.~63.3.
	140	死者の眼の犯人像←死者の網膜犯人像		○	東京	文芸春秋	2.5.

すべての作品を読み終えて後、作製した。殺人等の場所が架空の地名である場合は、(F) 印を付した。○印はアリバイやトリックがみとめられることを、\*印は殺人が必ずしも主題ではないことを示す。→や←は作品名や掲載紙の変遷、⇒は殺人等の場所変遷を表わしている。不明は殺人等の場所特定が困難であることを示す。

36点、第Ⅳ期 (1971~75年) 17点、第Ⅴ期 (1976~80年) 4点、第Ⅵ期 (1981~85年) 3点、第Ⅶ期 (1986~90年) 3点ということになる。第Ⅰ期から第Ⅳ期までの四半世紀の間、松本清張は毎年途切れることなく推理小説を書き続けた。特に昭和四十二年 (1967) は、18点にもおよんだ。昭和四十三年 (1968) が2点に過ぎなかったのは、この年がキューバと北ベトナムの訪問や西ヨーロッパへの取材があり、その上腹膜炎を患って40日間の入院を余儀なくされたからである。

松本清張の推理小説が昭和四十九年 (六十五歳、1974) 頃から激減するが、これは必ずしも体力の衰えに因るものばかりではない。この頃はすでに海外取材や昭和史研究、古代史の考古学的研究に余念がなかったからである。特に海外を舞台とした推理小説が、国内物に取って代わったと言うことができる。「神々の乱心」(平成三年一月~、『週間文春』連載) が未完の作であったように、彼が推理小説に傾けた情熱は終生衰えることはなかった。

### Ⅲ. 推理小説の転換点

#### 1. 松本清張の生い立ち

松本清張は、「もし、私に兄弟があったら私はもっと自由にできたであろう。家が、貧乏でなかったら、自分の好きな道を歩けたろう。…少年時代には親の溺愛から、十六歳頃からは家計の補助に、三十歳近くからは家庭と両親の世話で身動きできなかった。私に面白い青春があるわけなかった。濁った暗い半生であった。」<sup>4</sup>と回想している。彼のこのような生い立ちが、推理小説の展開において、後味の悪い終わり方、またはやり場のない結末という形を取らせてしまう、と言っても過言ではない。そのような推理小説は、枚挙にいとまがない程である。読者は、彼の推理小説に楽しい謎解きやありきたりのアリバイ崩しを期待してはならない、と思うようになるだろう。

松本清張は、また「私は小説家志望ではなかった。…生活の苦しみの逃避のために、思いついた空想から小説を書いてみることにした。」<sup>5</sup>

<sup>4</sup> 松本清張「半生の記」(『松本清張全集【34巻】』1974、所収)、文芸春秋社、9頁。

<sup>5</sup> 前掲(4)、82~83頁。

と書いていることからわかる通り、もともと彼は小説家を目指していたわけではなかった。作家になるために同人誌の活動をしたという経験もない。もっぱら現実の不遇な暮らしから逃れるために、あるいは生活費を稼ぐために筆をすすめた。それは、狭い工具住宅（昭和二十～二十七年）で7人の寝息に囲まれ、渋団扇で蚊を追いながら書き続けるという困難な作業であったと云う。

彼にとっては高等小学校（現在の中学校）卒という肩書きが先の見えない重荷となり、給仕や工具、箒の行商など、自ら望まない職を頻繁に変えざるを得なかった。昭和十四年30歳の時、松本清張は、朝日新聞九州支社広告部の嘱託となった。39歳になって、やっと朝日新聞西部本社広告部意匠係（図案家）という職と地位を得た。推理小説ばかりでなく、時代小説や政治・社会小説及びノンフィクションにおいても、弱者の味方に偏ったり、反権力の様相を帯びたりするのは、彼の高等小学校卒という肩書きや不遇な経済・家庭的環境がそうさせたと言っても過言ではない。

## 2. 清張以前と清張以降

松本清張は、日本の推理小説について「戦前からそうだが、戦後の探偵小説は、どうも人間というものが描かれていない。描かれていないというよりも、作者が初めから描く意思を抛棄しているように見える。…いわゆる探偵小説は、長い間、一般社会の読者からしめ出され、ただ、謎解きやトリックなどに凝っている一部の「鬼」と称する読者相手のパズルの遊戯になり下がってしまった。私はかねてから、いわゆる推理小説が一般と縁もないところで行われてことに不満を持っていた。この不満はむしろ、

そういう小説を書き続けて来ている作家の側に抱いていたと言っている。相変わらず空疎で、コケ威し的な形容詞。これでもか、これでもかと、押し付けてくる…私は自分のこの試作品のなかで、物理的なトリックを心理的な作業に置き換えること、特異な環境でなく、日常生活に設定を求めること、人物も特別な性格者でなく、われわれと同じような平凡人であること、…誰でもが日常の生活から経験しそうな、また予感しそうなサスペンスを求めた。」<sup>6</sup>と言っている。このような指摘をしたのは、松本清張が初めてである。

日本の推理小説は、清張以前は空疎でまよかしのよう探偵小説であった。一方、清張以降は現実生活に密着した、ふつうの人間と一般社会との関係性を鋭く描く推理小説になったと言え換えることができる。松本清張の推理小説が、人口に膾炙するようになったと思う典型的な実例を二つ上げてみたい。一つは、昭和四十四年カップ・ノベルスの清張作品が総計一千万部を突破したことである。もう一つは、昭和五十一年毎日新聞社の全国読書世論調査で松本清張が〈好きな著者（作家）〉の第1位になったことである。以後の調査でも、五十二年と五十四年を除いて、五十九年まで松本清張は第1位を占めていた。

## 3. 推理小説のテーマ

文学は、一般的には純文学と大衆文学に大別される。松本清張は、自らの推理小説を大衆文学と捉えていた。また、純文学と大衆文学の間は存在しないというのも彼の基本的な立場であった。しかし、これは書き手の主張であって、読み手のそれではない。松本清張の推理小説を読めば読む程、作者の深遠な意図がおぼろ

<sup>6</sup> 松本清張「日本の推理小説」(『松本清張全集【34巻】1974、所収)、文藝春秋社、385～387頁。

げながら見えてくる。

後述するように、彼の推理小説を検討してみたが、全作品（140点）のなかでアリバイを争ったものは17点、トリックを凝らしたものは77点であった。その両方を含む作品は、「点と線」「眼の壁」「捜査圏外の条件」「わるいやつら」「二つの声」「夜光の階段」「梅雨と西洋風呂」「巨人の磯」の8点に過ぎない。松本清張は、技巧を凝らすのに熱心ではなかった。それに対して、殺人の動機が存在しないという作品は見当たらない。殺人の動機は重層的な事例もあり、延べにして168を数えた<sup>7</sup>。ここでは動機の詳細については言及しないが、それら殺人の動機は複雑な家族や社会を取り巻く人間関係のなかに描かれている。それは人間と何か、人間の社会とはどういうものであるのか、という根源的な問いかけを内包している。

ヒトと他の高等な霊長類（チンパンジーやゴリラなどの類人猿）を分ける基準が信頼性を失っていくなかで、ヒトがヒトたらしめているものは知性であると長く信じられてきた。ほとんどの動物は喰わんがために他の動物を殺すことがあっても、同じ種を殺すことはきわめて稀である。ゴリラやオランウータンが自分達の仲間を殺害したという事例は、目下のところ報告されていない。しかし、知性を身につけていたはずのヒト（ホモ・サピエンス）は、家族や社会及び国家という組織または集団の関係性において頻繁に殺人を繰り返してきた。人類史の後半は、或る意味で殺戮（戦争）の歴史であったと言っても過言ではない。殺人は、最も人間的な悩ましい行為のひとつである。松本清張は、このことを推理小説（虚構）という手法を使って、問い続けてきたのではないだろうか。

殺人という行為は、人間にとって最も否定的

で致命的な所業である。読者は、推理小説を通してこのような問題に正面から向き遭わざるを得なくなる。清張作品が殺人という忌まわしい出来事をテーマにしているにもかかわらず、読者の側がひどく魅了させられてしまうのはなぜだろうか。それは、読者が推理小説を通して人間とその社会に潜む最も深刻な問題に覚醒されずにはいられなかったからである。

#### IV. 松本清張の地理的空間

##### 1. 憧れの図上旅行

松本清張は、「私は少年の頃から未知の土地に憧れを持っていた。今から考えると、それは自分がどこへも行けない不自由な環境からの諦めからきていたと思う。小学校でも、地理の時間が一番好きだった。教科書に嵌め込まれてある各地の風景の銅版画は、こよなく私の気持ちを沸かせたものである。そこに書かれている山の姿、歩いている人、集まっている家並み、一本の道、それがさまざまな空想を湧かせ、どんな小説を読んでいるよりも面白かった。」<sup>8</sup>、と書いている。松本清張には、幼き頃より〈どこか知らない町〉を訪ねたいという地理的な憧憬がすでに芽ばえていた。それは大人になってもほとんど消え去ることはなかったと思われる。彼にとって、地理的な興味や関心は歴史や考古に先立つものであった。その後の歴史や考古に対する探究心は、おそらく地理的空間という基盤の上に成り立つものである。松本清張は、おそらく図上旅行を推理小説の中に描きたかったのであろう。彼は、自らが図上の旅人になることを至福の喜びとしていたのかも知れない。

松本清張の推理小説には、日本各地の風景が描かれている。名作「点と線」（昭和三十二年

<sup>7</sup> 前掲（2）、20～23頁。

<sup>8</sup> 松本清張「図上旅行」（『別冊週聞朝日』1960、所収）、朝日新聞社、34～35頁。

二月～三十三年一月)には、黒幕の男の妻に“時刻表には日本中の駅名がついているが、その一つ一つを読んでいると、その土地の風景までが私には想像されるのである。それも地方(ローカル)線の方が空想を伸ばさせてくれる。”という台詞を語らせる場面がある。そもそも「点と線」や「時間の習俗」(昭和三十七年一月～十一月)は、旅行の専門月刊誌『旅』に連載されたものであった。「点と線」に見る、東京駅の13番ホームから15番ホームを見通せるたった4分間(17時57分～18時1分)に目撃者を造るという手法は、推理小説の先駆的な業績であったと云われる。時刻表を駆使した彼の緻密やり方は、その後の推理小説に大きな影響を与えた。また推理小説界では、地方の風土を頻繁に描くようになった。「点と線」は、推理小説と地理的空間との関係性を強く暗示していたようである。

## 2. 松本清張の地理的空間

松本清張が生涯を通して、地理的空間の認識をどのように深めてきたのか、まずそれを確かめることから始めたい。彼は、生まれてからの40年間余りを山口県と福岡県で過ごした。残りの約40年間は、東京暮らしであった。松本清張は一時期を除いて、日記を書くことはなかった。「清張日記」<sup>9</sup>は昭和五十五年一月二日から始まり、昭和六十年五月二十九日で終息している。「清張日記」の一部である<日記メモ>は、昭和四十三年二月二十五日～同年三月二十二日までに過ぎない。いずれも毎日必ず綴ったものではない。その内容は、ほとんどが考古学的な関心と海外取材で占められていた。日本列島を対象地域とした、推理小説を書くための取材日記はほとんど見当たらない。まとも

た形で詳しい行動記録が残されているのは、昭和五十六年だけである。その理由はよくわからない。

松本清張の地理的空間の認識は、おおよそ5期に分けることができる。第Ⅰ期(明治四十二年～大正期初め)は、幼少期から少年期を過ごした時期である。この頃は、福岡県と山口県での生活体験が主である。第Ⅱ期(大正半ば～昭和二十年)は、青年～壮年期(結婚、徴兵に伴い衛生兵として朝鮮滞在)である。松本清張は、福岡県と佐賀県を中心とする北九州の遺跡巡りを繰り返していたようである。彼にとって、遺跡見学はひと時の安らぎを感じることができる唯一の楽しみだったのだろう。第Ⅲ期(昭和二十～二十六年)は、戦後の行商を主とした頃である。この時、松本清張は日本各地を訪れることになる。箒の商いであったにもかかわらず、北九州から関西地方にかけて頻繁に出かけた。日本各地で多様な自然環境を見聞し、様々な人々と触れ合う機会があったに違いない。松本清張が推理小説を書くためのヒントや知識及び観察・洞察力は、この頃に獲得されたのではないだろうか。「ひとり旅(エッセイ文・画)」(昭和三十年一月)<sup>10</sup>や「函上旅行」のように、そのことを裏付ける文章が若干残されている。第Ⅳ期(昭和二十六～三十八年)は東京に居を構え、国内を舞台にして推理小説を盛んに書いた時期である。この間、日本各地を盛んに取材していたと想定される。第Ⅴ期(昭和三十九年～平成四年)は、五十歳半ばから始まる海外取材の時期である。松本清張は活躍の場を世界に求め、まるで堰を切ったかのように外遊した。海外を舞台とする推理小説を数多く書きながら、宗教や文明の源流の研究もすすめていた。死去した年にも海外取材が、すでに予

<sup>9</sup> 松本清張「清張日記」(『松本清張全集【65巻】1996、所収)、文藝春秋社、153～408頁。

<sup>10</sup> 松本清張「ひとり旅(エッセイ文・画)」(『旅』1955、

所収。北九州市立松本清張記念館編(2002)『松本清張研究』第三号<採録版>使用、124～128頁)。

定されていた。当時のかなり克明な記録がまとまった形で残されており、様々な資料からも拾うことができる（第2表）。

結局のところ、推理小説を書くための日々のちょっとした行動や取材旅行を明らかにすることは、とても困難な作業であった。東京暮らしの松本清張は、おそらく取材のために日本各地を歩いていたと推量される。とりわけ推理小説

を盛んに発表した昭和三十年（1955）～四十八年（1973）頃の資料がないのは、致命的であった。ひどい書癪にかかり、代筆速記をさせなければならぬ程の多忙を極めた時期であったので、仕方がないであろう。一つ一つを拾い集めて整理した地理的空間の認識と推理小説において殺人等が行われた場所との関連性を探ることにしたい。

第2表 松本清張の生涯を通してみた地理的空間

生涯（時間的な経過）	居住地	地理的空間
明治四十二年（1909）	福岡県企救郡板櫃村（北九州市小倉北区）篠崎で出生	<p>少年期に下関、和布刈、長府、壇ノ浦、赤間宮、小倉、門司、香椎、博多、遠賀川、山口県豊浦村。青年期に北九州の遺跡巡りを繰り返す、京都と奈良へ。</p> <p>取材（山口県豊浦村の中山神社）</p> <p>大分県天ヶ瀬温泉 北九州の考古遺跡を広範囲に巡る 大分県田染村（現、豊後高田）</p> <p>京城（現、ソウル）の鍾路や朝鮮総督府近辺を散策</p> <p>井邑散策</p> <p>箒の行商⇒福岡県八幡・小倉・黒崎、佐賀県佐賀・神埼、大分県豊後高田・安心院町・富貴磨崖仏・臼杵、</p>
明治四十三年（1910）	山口県下関市旧壇ノ浦	
大正二年（1913）	山口県下関市田中町	
大正六年（1917）	福岡県小倉市	
大正十五年（1926）		
昭和十一年（1936）	佐賀県神埼町の直子嬢と結婚	
昭和十三年（1938）		
昭和十五年（1940）		
昭和十七年（1942）		
昭和十八年（1943）	福岡県久留米（入隊）	
昭和十九年（1944）	朝鮮・京城郊外の竜山（入隊） 家族は佐賀県神埼町へ疎開	京城（現、ソウル）の鍾路や朝鮮総督府近辺を散策
昭和二十年（1945）	朝鮮・全羅北道の井邑（入隊） 神埼町から小倉市へ（帰還）	井邑散策
昭和二十一年（1946）～ 昭和二十三年（1948）	福岡県小倉市黒原（家族）	箒の行商⇒福岡県八幡・小倉・黒崎、佐賀県佐賀・神埼、大分県豊後高田・安心院町・富貴磨崖仏・臼杵、
昭和二十六年（1951） 昭和二十八年（1953）	東京都杉並区荻窪（単身）	受賞に伴い上京する 東京とその周辺、取材（信州諏訪） 取材（信州上諏訪、都内）京都、宇治、宇治山田、名古屋
昭和二十九年（1954）	東京都練馬区関町（家族）	信州上諏訪、伊豆、天城峠、修善寺
昭和三十二年（1957）	東京都練馬区上石神井（家族）	取材（東北地方、十和田湖、十三湖）
昭和三十三年（1958）		北海道旅行（網走など）
昭和三十五年（1960）		富山県高岡・新湊
昭和三十六年（1961）	東京都杉並区上高井戸（家族）	山陰地方（米子、鳥取県日野郡矢戸村、現・日南町矢戸、津山、備中神代、皆生温泉）
昭和三十七年（1962）	愛知県蒲郡	
昭和三十九年（1964）	海外取材（コペンハーゲン、アムステルダム、パリ、ロンドン、ジュネーブ、ローマ、カイロ、ベイルート）	
昭和四十年（1965）	海外取材（中近東）、取材（福島県）	
昭和四十二年（1967）	恵林寺	
昭和四十三年（1968）	訪問（キューバ、北ベトナム）、海外取材（オランダ、ベルギー、イギリス）	
昭和四十四年（1969）	海外取材（ラオス）、東南アジア旅行	
昭和四十八年（1973）	海外取材（イラン、トルコ、オランダ、イギリス、アイルランド）、訪問（北ベトナム）	
昭和四十九年（1974）	沖縄旅行	
昭和五十年（1975）	大分県鯛生、熊本県阿蘇山、大分県日田	
昭和五十一年（1976）	京都、奈良、飛鳥	
昭和五十二年（1977）	福岡市でシンポジウム、海外取材（米国、カナダ）	
昭和五十三年（1978）	海外取材（ヨーロッパ、イラン、東南アジア）	
昭和五十四年（1979）	海外取材（昨年末からシンガポール、ベナン、バンコク、香港）	

生涯（時間的な経過）	居住地	地理的 空間
昭和五十五年（1980）	長野県軽井沢、京都、栃木県鹿沼・益子、関西（京都、大阪・堺・河内長野・古市古墳群、飛鳥）、神奈川縣藤沢（高速道路）、京都、小倉、久留米	
昭和五十六年（1981）	京都市でシンポジウム、飛鳥、大分県大津町五浦・国東半島・豊後高田市・宇佐神宮・別府・安心院町・日出町・国見町、兵庫伊丹・三田、京都府京都・宇治・宇治原、名古屋、三重県宇治山田、奈良、長野県上諏訪・伊那谷・富士見高原、静岡県天城峠・伊豆、茨城県勝田、福岡県久留米・福岡市・春日・八女・大宰府、佐賀県神埼町、熊本県玉名郡・菊水町・武雄温泉、栃木県水橋・真岡・芳賀町、茨城県下館、大阪、奈良県奈良・当麻寺・唐招提寺、滋賀県信楽町、香川県高松・栗林公園・小豆島、岡山県玉野・下津井、埼玉県嵐山町、福島県勿来	
昭和五十七年（1982）	鳥栖市でシンポジウム、海外取材（スイス、オランダ、ロンドン）、取材（長野県飯田・上諏訪、尖石・井戸尻遺跡、茅野、山梨県小淵沢）、浦和、京都	
昭和五十八年（1983）	海外取材（中国の福州・無錫・西安・蘭州・北京、インドのニューデリー・パトナ・マドラス・コナラク・カルカッタ）	
昭和五十九年（1984）	講演会と海外取材（マンチェスター、ロンドン、デュッセルドルフ、ノルマンディ、ドーベル、パリ、モンテカルロ、ミラノ、ジュネーブ、ルガーノ）	
昭和六十年（1985）	海外取材（スコットランド、フランスのカルナック、フランス、モナコ、スイス、リヒテンシュタイン）、大分県竹田市・日出町・朝地町、三鷹の禅林寺、天草地方	
昭和六十一年（1986）	海外取材（オーストラリア、チェコスロバキア、イギリス）、松江	
昭和六十二年（1987）	海外取材（ドイツ、オーストリア、リヒテンシュタイン、スイス、フランス、南仏のマルセイユ・アルル・グルノーブル・カマルグ地方）	
平成元年（1989）	海外取材（アイルランド、オランダ、ドイツ、オーストリア）、吉野ヶ里	
平成二年（1990）	海外取材（イギリス、ドイツ）	
平成四年（1992）	8月4日逝去（享年82歳）	
父は鳥取県日野郡矢戸村（現、日南町矢戸）生まれ、同県西伯郡米子町（現、米子市）の松本家へ養子となる。母は広島県賀茂郡西志和村別府（現、東広島市）生まれ。		

「清張日記」（『松本清張全集【65巻】』所収、153～408頁）、「半生の記」「年譜」（『松本清張全集【66巻】』所収、1～84頁及び593～623頁）、「松本清張記念館図録」（1～98頁）、「松本清張の旅」（1～24頁）から作製した。

## V. 土地鑑から見た清張文学

### 1. 殺人等の場所

松本清張の推理小説において殺人等が行われた場所と作品の主な舞台が同一であるとは限らない。ここでは、作品の舞台について言及することは避けた。殺人等が行われた場所は、地域的に東京都、東日本、西日本に3区分した。東日本と西日本の境界は、一般的な地理指標に基づいて若狭湾～関ヶ原～伊勢湾にかけて西北から東南に線引きした。

殺人等を地域・定量的に見た時、いくつかの特徴や傾向が認められる。殺人等の場所は210ヶ所を数えるが、そのうち35ヶ所が不明である。不明箇所を除外すると、東日本が144ヶ所（全体175ヶ所の82.29%）に対して、西日本は31ヶ所（17.71%）に過ぎない。東日本の際立った偏りが認められる。一方、東京都内は68ヶ所（全体の38.86%、東日本の47.22%）にもなる。実に東京都内は、東日本の約半分を占めることになる。殺人等の場所は、都市や農山漁村、山

岳や山中、森林や峡谷、高速道路や操車場、海浜や海峡、河川や湖沼、埠頭、温泉、墓地、古墳など、多様性に富んでいる。殺人等の場所を特定するにあたって、松本清張は熟考を重ねたのであろう。それらの場所がひどく重複することのないように工夫したと推量される。前述したように、彼にはかねてから地理的な関心や体験が具わっていたからできたのであろう。

殺人等の場所は、推定の域を出なかつたり、架空の地名や不明であつたりすることもある。福岡県坊城町・垣津村、九州の黒岩村・水尾市、出雲地方の葛城村、高知県川上市、四国の芝田市、北海道北浦市、甲信地方K市臨雲峡は、実際には存在しない地名である。しかし、松本清張が一定の地名も付しているのには、それなりの理由があつたのではないだろうか。すなわち九州、福岡県、出雲地方という特定地域は、いずれも彼にとって土地鑑のある地域である。坊城町は存在しないが、福岡県田川郡には坊城町という行政区が存在する。松本清張が故郷に執着やこだわりをもつのは当然であろう。殺人等が

かなり限定された地域で発生している場合がある一方、ただ漠然と広範囲な地域であってそこがどの辺りかを特定することがひどく困難な例もある。すなわち中国地方や東北地方及び石川県などが、それに該当する。なお神奈川県一碧湖と岐阜県飛騨小坂樺原温泉の所在は、結局確かめることができなかった。いずれにしても地理的に見た時、地名の水準が同質ではない（第3表）。

たとえ小説の世界であっても、特定の地域が殺人と結びつくことは、地元にとって好ましくはないだろう。それゆえ、当時の松本清張は殺人の場所を広範な地域にしたりあるいは架空の場所にしたりすることによって、地元への配慮をしたのかも知れない。今日ではむしろ殺人事件と結びついても、推理小説の舞台となることによって地元が潤うこともある。

第3表 研究対象の推理小説に見る殺人等の場所

地名	件数	地名	件数	地名	件数	地名	件数
東京（郊外・下町・湾を含む）	31	東京／青山墓地	1	東京／蒲田操車場	1	東京／市ヶ谷	1
東京／武蔵野台地	5	青梅	3	世田谷	1	信濃町	1
・武蔵野		高尾山	1	多摩川	1	練馬区	1
目黒	2	赤坂	1	多摩市	1	大井埠頭	1
向島	1	国立	1	麻布	1	首都高速道路	1
新宿	1	有楽町	1	国分寺	1	品川区戸越	(1)
		荒川	1	江古田	1	武蔵小金井	1
		阿佐ヶ谷	2	深大寺	2		

西 日本		東 日本（東京を除く）	
福岡県小倉	(2)	北海道	1
香椎海岸	1	北浦市	2
水城	1	北浦市	1
筑紫野	1	様似	1
三池炭鉱	1	青森県十和田湖	1
垣津村	1	奥入瀬川	1
坊城町	1	湯村温泉	1
九州／黒岩村	1	和歌山県の海辺	1
九州／水尾市	1	海草郡	1
山口県豊浦	1	紀淡海峡	1
大分県耶馬溪	1	大阪府古市古墳	1
鳥根県	1	奈良県金剛山	1
出雲地方葛城村	(1)	三重県鈴鹿山脈	1
中国地方	1	尾鷲	1
山陰地方	1		
広島県田野浦	(1)	北海道	1
戸内	1	新潟県柏崎沖	1
		群馬県富岡市	1
		千葉県鹿野山	1
		南房総鋸山	1
		蟹崎	(1)
		袖ヶ浦	1
		山梨	1
		山梨県巨摩郡	1
		千代田湖	1
		塩山市	1
		富士の樹海	1
		甲信地方K市	1
		臨雲峽	1
		埼玉県柏原	1
		神奈川県横浜	1
		山林	1
		相模湖	3
		一碧湖	1
		江ノ島	1
		真鶴町	2
		神奈川県横浜沖	(2)
		箱根	1
		浦賀	1
		強羅	1
		逗子	1
		仙石原	1
		湘南地方N地	1
		湯河原	1
		厚木	1
		東名高速道路	1
		静岡県天城峠	1
		伊豆・西伊豆	1
			(1)
		修善寺温泉	1
		熱海	4
		戸田	1
		大仁	1
		清水港	1
		長野県（信州）	3
		姫川上流	1
		上山温泉	1
		中央アルプス	2
		天竜川	1
		鹿島槍ヶ岳	1
		岐阜県飛騨小坂	1
		樺原温泉	(1)
		愛知県名古屋	1
		北陸地方の農山村	1
		石川県	1
		石川県のF村	1
		能登金剛	1
		鶴来町	1
		北陸のT市	(1)

第1表から作製した。( ) は推定や未遂を示す。数字は殺人等の数を示す。

## 2. 松本清張の土地鑑

「張込み」(昭和三十年十二月)の舞台は北九州S市であるが、これは清張夫人の出身地である佐賀市ではなかっただろうか。松本清張は、差し障りがあるとはいけないと判断して、S市としたのだと思う。松本清張は昭和二十三～四年頃、中国地方を旅した時、乗客が電車のなかで東北地方特有のズーズー弁で話しているのに興味を覚える。出雲地方の一部は、<東北弁>が方言として話されていた。「砂の器」(昭和三十五年五月～三十六年四月)では、これをヒントに犯人の育ちが東北地方だったのではなく、木次(きすき)線の亀嵩(かめだけ)や三成(みなり)あたりであったことに読者は驚愕する。また松本清張は、後年首都高速道路を走行中に「馬を売る女」(昭和五十二年一月～四月)の(殺人の)ヒントを思いついたことを明かにしている。既述してきたように、松本清張が土地鑑を大事にし、かつそれにひどくこだわっていたのは間違いないだろう。

松本清張は、「白い闇」(昭和三十二年八月)、「天城越え」(昭和三十四年十一月)、「万葉翡翠」(昭和三十六年二月)、「十万分の一の偶然」(昭和五十五年三月～五十六年二月)、「彩り河」(昭和五十六年五月～五十八年三月)を書くにあたって、それぞれ十和田湖、伊豆・天城峠・修善寺、上諏訪・信州、神奈川県藤沢・東名高速道路を訪れたり、都内の企業関係者に取材していたりしていたことが断片的な記事から読み取ることができる。

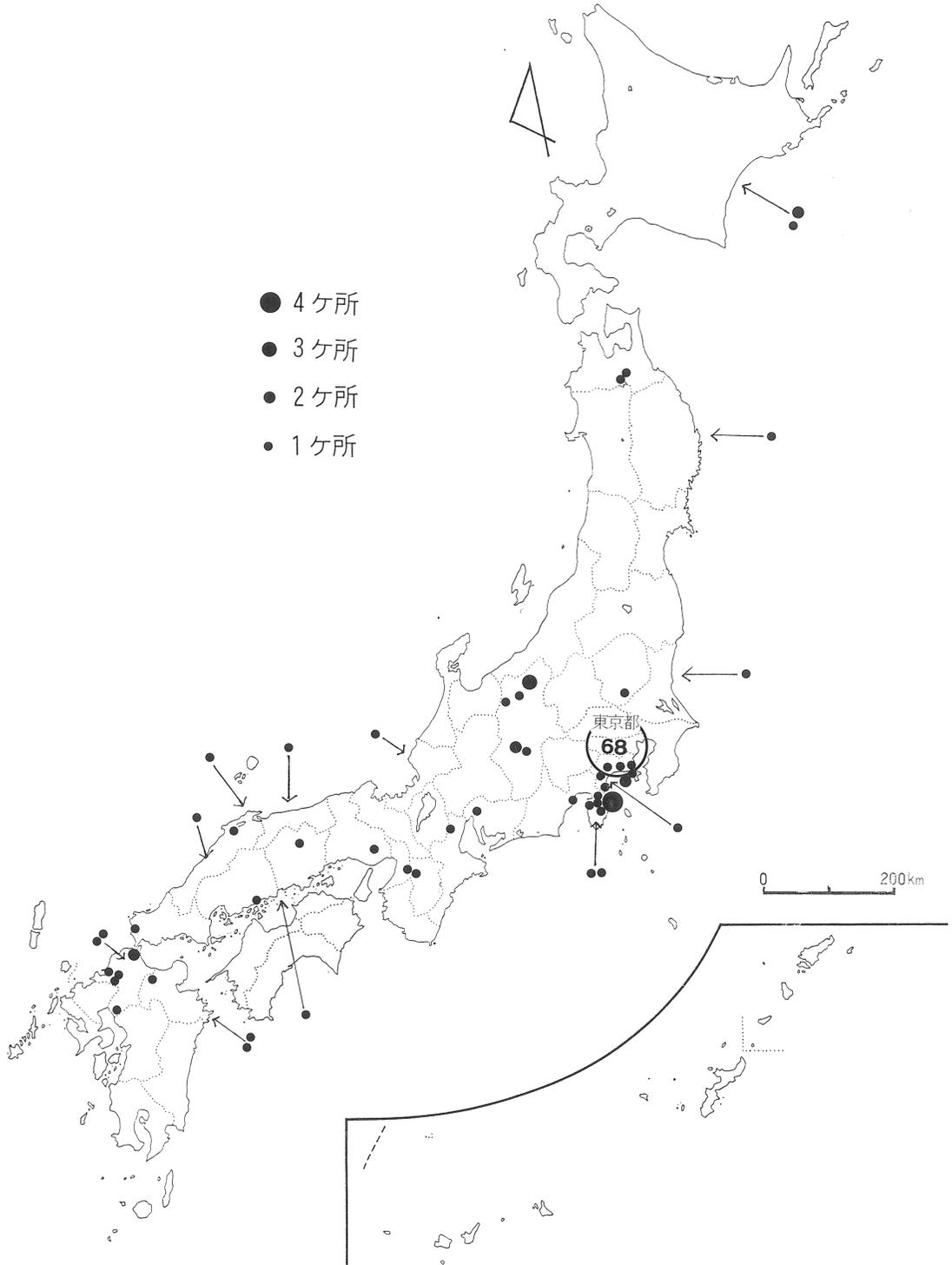
松本清張がただ漠然とした形で殺人等の場所を選んだとは考えにくい。松本清張の土地鑑があると想定される場所は、殺人等の全体数175ヶ所のうち129ヶ所(73.37%)を数える。東京とその周辺は、88ヶ所(50.29%)である。これらは、きわめて高い数値である。また地域的には、かなりの偏りがある。殺人等の場所は、福岡県を中心とする北九州と東京都及びその周

辺に特化している。松本清張にとって、それらの地域は生活圏でもあった。それ以外の地域も、諏訪地方や伊那地方及び伊豆半島などのように、彼がかつて訪れたことのある地域である。殺人等の発生した地域が、西日本に比べて東京都内や東日本・北九州が特化しているのは、そのためであろう。松本清張は、推理小説に登場する殺人等の場所選定について、長年の居住体験と取材に基づく土地鑑を最も重視していたことが明らかになった(第1図)。

## VI. 結語

松本清張の登場により、日本における推理小説の世界は一変した。推理小説の内容は非現実的な絵空事から現実社会の描写に、マニアの特殊世界から一般大衆の世界に転換し、予想もつかない程の読者層を獲得した。清張以前・清張以後と云われる所以である。松本清張の推理小説には、彼の不遇な人生そのものが投影されていると思う。松本清張にとって、推理小説は自己表現のための手段だったのではないだろうか。殺人という否定的な側面を通して、彼は人間とその社会に内在する問題を描きたかったのではないだろうか。

松本清張の推理小説には、日本の有名な温泉地や湖・海岸などの観光地ばかりでなく、地方都市や日本各地の山川が登場する。推理小説に登場する事件(殺人)と地名と時刻表は、セットとなった。清張以後の推理小説もほとんどそれを踏襲しており、まるで定番のようになった。松本清張が推理小説で日本各地を紹介したことにより、地元には観光客が訪れるようになった。それは、旧国鉄のキャンペーン<ディスカバー・ジャパン>(昭和四十八年)の魁であった。日本の旅行ブームに火を点けそれを定着させた最大の功労者は、実は松本清張ではなかっただろうか。彼には、おそらく意図せぬ副産



第1図 松本清張の土地鑑に基づくと想定される殺人等の場所

物であったに違いない。松本清張には考古学研究や昭和史研究の碩学というイメージがついてまわるが、それらも地理的な空間認識の上になり立っていたと判断される。

このような地理的空間の認識は、彼の不遇な人生から醸成されたものである。殺人等の事件には、地名はつきものである。松本清張の場合、それにはかなり明瞭な傾向が認められる。彼が志向する地理的空間は、現実からの逃避や過去の否定という漠然とした憧憬から始まったと考えられる。すなわち図上旅行の延長線上にあった。それがやがて推理小説を書くにおよんで、土地鑑のある場所に題材を求めようになった。わざわざ取材をして場を確かめるという方向へ収斂していったことは想像に難くない。こうした態度は、おそらく若い時に体験した考古遺跡巡りや箒の行商に伴う日本各地での漂白体験がその出発点になっていたのであろう。松本清張の推理小説に登場する地名（殺人等の場所）は、彼の精神的な基層をなす強烈な地理的関心・遍歴によって得られた空間認識、言い換えれば土地鑑が基礎になっていると結論付けた

い。ただしまだまだ資料不足は否めないので、松本清張の土地鑑と殺人等の場所との平仄を完全に合わせることは多少の無理がある。今後の検討課題である。

### 主な参考文献

- 岩見幸恵著、文献目録・諸資料等研究会編（2004）『松本清張書誌研究文献目録』、勉誠出版。
- 北九州市立松本清張記念館編（1998）『松本清張記念館図録』。
- 北九州市立松本清張記念館編（2002）『松本清張研究』第三号。
- 北九州市立松本清張記念館編（2003）『松本清張の旅』。
- 北九州市立松本清張記念館編（2016）『世界文学と清張文学』。
- 駒崎総男（2011）『松本清張著作活動記録（ダイヤグラム）』、自費出版、5～8頁。
- 松本清張（1971～1966）『松本清張全集【1～66巻】』、文藝春秋社。
- 松本清張（1960）『蒼い描点』、光文社。
- 松本清張（1961）『高校殺人事件』、光文社。
- 松本清張（1964）『果実のない森』、光文社。
- 松本清張（1967）『二重葉脈』、光文社。
- 松本清張（1972）『影の地帯』、新潮社。
- 松本清張（1976）『眼の気流』、新潮社。
- 松本清張（1992）『犯罪の回送』、角川書店。
- 松本清張（1993）『隠花平原』、新潮社。